

日本語の雑談における物語の後続文脈への展開方法

張末末・早稲田大学大学院生

1. はじめに

大小様々の話題から構成される雑談の談話には、過去の出来事や体験を語る「物語(narrative)」(Labov 1972¹, 李 2000²)がよく生じる。この物語³は、前後の文脈から区別されるが、同時に連続性も保っているという(野村 2000:48)。日本語の会話教育には、日本語学習者の物語に関する実践報告(木田・小玉, 2001; 中井, 2005 等)はあるが、物語からどのように次の話題に展開するかについては扱われていない。本研究では、文章・談話論の立場から、雑談における物語と後続文脈との関係を解明し、上級日本語学習者に対する雑談の話題展開の会話教育への応用を目的としている。

2. 先行研究

日本語教育の分野における物語に関する研究は、従来、物語の内部の構造と表現に焦点が置かれ、インタビューやストーリーテリングなどのタスクによって導き出される物語が主な研究対象とされてきた。

日本語の雑談に自然に生じる物語を取り上げて、その終了する過程に言及した研究は、李(2000)、鈴木(2006)、佐々木(2010)等がある。物語の終了にその評価が述べられることが多いが、接触場面における学習者の物語には、評価が聞き手の日本語母語話者との協働によって形成される傾向があるという(鈴木, 2006)。学習者が自分の物語に評価を加えられないところに、日本語教育の一つの問題点があると思われる。佐々木(2010)も、日本語母語場面では物語に対する評価が積極的に言語化され、共感の構築が導かれるのに対して、日中接触場面では会話を滞らせずに先へと進めることが重視されると述べている。雑談における物語に対する評価は、物語に直接関連しない話題をするための布石になりうるとされている(李 2000:158-159)が、物語の後続文脈への具体的な展開方法は明確にされていない。

雑談の談話の文脈展開を動的に把握するために、佐久間(2002; 2009)の「接続表現」を主な形態的指標とする全3類14種の「文脈展開機能(話題統括機能)」⁴の分析観点を導入する。本研究では、雑談における物語の話題から後続の話題がどのように展開されるのかに着目し、物語に後続する話題の「話題統括機能」(佐久間 2009:112)を分析する。「最小の話題が一对の『提題表現』と『叙述表現』からなる」(佐久間 2002:167)ことから、物語の話題と後続の話題をそれぞれ「最小の話題」からなるまとまりとし、その話題のまとまりの統括機能に基づく「話段」(佐久間 1987; 2003)という単位を用いる。

3. 研究課題

本研究は、日本語の雑談における物語の後続文脈への展開方法について、日本語母語場面(以下、「母語場面」と称す)と日中接触場面(以下、「接触場面」と称す)を比較し、日本語母語話者(以下、「NS」と称す)と中国人日本語学習者(以下、「CNS」と称す)の相違を解明する3つの課題を設けた。

【課題1】母語場面の雑談におけるNSの物語の後続文脈への展開方法はどのようなものか。

【課題2】母語場面と接触場面の雑談におけるNSの物語の後続文脈への展開方法はどのように異なるのか。

【課題3】雑談におけるNSとCNSの物語の後続文脈への展開方法はどのように異なるのか。

¹ Labov(1972) defines narrative as one method of recapitulating past experience by matching a verbal sequence of clauses to the sequence of events which (it is inferred) actually occurred.

² 李(2000:8)は、「物語」を「過去に発生した出来事を雑談の中で報告すること」と定義している。

³ 「会話物語」(メイナード, 1993)とも呼ばれている。

⁴ 「接続表現だけではなく、指示・提題・叙述・反復・省略表現等による総合的な機能である」(佐久間 2002:167)。

4. 研究方法

4.1 分析対象

本研究の分析対象は、同一のNSによる母語場面と接触場面の各約30分間の親しい友人同士の日本語の雑談5組全10資料(計5時間19分28秒)である。調査協力者は、NS10名(NS1~10), CNS5名(CNS1~5)の全15名の20代女性である。調査協力者NS1~5は、母語場面と接触場面の両場面の参加者である。CNSは、全員日本滞在歴2~3年の大学院生で、「日本語能力試験N1」取得の中国人上級日本語学習者である。

4.2 分析方法

本研究では、Labov(1972)⁵と李(2000)の定義をもとに、「物語」を「連続する2つ以上の節からなる過去の出来事を再現する語り」として定義する。物語の話題の「中心発話」⁶の統括する範囲を「物語の話段」として、基本的に、「前置き表現」⁷、「物語」、「物語に対する評価」(以下、「評価」と称す)から構成される。「物語」に後続する「評価」の話段は、「物語の話段」の小話段に位置付けられる。物語に後続する話題の中心発話の統括する範囲を「後続話段」⁸と称す。隣接する話段に提題・叙述・接続・指示・反復・省略表現等の形態的指標によってつながりが見出せるものをまとめて1つの大話段とする。

分析手順として、まず、佐久間(2009:112)による全3類14種の「話題統括機能」の分類を用いて、「物語の話段」から「後続話段」がどのように展開されるのかを分析する。その際、「後続話段」の始まりとなる「発話」⁹を分析するために、「後続話段」を開始する情報内容を示す実質的発話を、語り手と聞き手のどちらが行ったかに着目し、「I. 物語の語り手が後続話題を始める場合」と「II. 物語の聞き手が後続話題を始める場合」の別に、「話題統括機能」を集計する。

5. 分析結果

【表1】雑談全10資料における物語の「後続の話段」の話題統括機能⁰の集計

雑談全10資料から、母語場面79例、接触場面73例(NS34例, CNS39例)の計152例の物語が得られた。「後続話段」の「話題統括機能」を分析し、「後続話段」の総数に対する「話題統括機能」の使用傾向を「I」と「II」の別に集計した結果を【表1】にまとめた。

話題統括機能	定義	母語場面				接触場面				
		NS1~5: 41(100.00%)		NS6~10: 38(100.00%)		NS1~5: 41(100.00%)		CNS1~5: 32(100.00%)		
		I	II	I	II	I	II	I	II	
A 話題開始機能	話題を始める。	1(2.44%)	0	1(2.63%)	2(5.26%)	0	0	3(7.31%)	0	0
a1 話を始める機能	話を最初から始める。	0	0	0	0	0	0	0	0	0
a2 話を再び始める機能	前の話とは違う話を途中から始める。	1(2.44%)	0	1(2.63%)	2(5.26%)	0	0	3(7.31%)	0	0
B 話題継続機能	話題を続ける。	18(43.90%)	22(53.66%)	16(42.11%)	19(50.00%)	16(39.02%)	21(51.22%)	14(43.75%)	18(56.25%)	0
b1 話を重ねる機能	前の話を繰り返す、同じ話を続ける。	0	0	0	0	0	0	0	0	0
b2 話を進める機能	前の話を言い換えて、説明する。	0	0	0	0	0	0	0	0	0
b3 話を進める機能	前の話の結果や反対の話をする。	6(14.63%)	6(14.63%)	7(18.42%)	7(18.42%)	5(12.20%)	6(14.63%)	4(12.50%)	0	0
b4 話をうながす機能	話が先へと進むように働きかける。	1(2.44%)	0	3(7.89%)	0	0	4(9.76%)	0	0	0
b5 話を戻す機能	一度それた話を再び元の話に戻す。	3(7.32%)	3(7.32%)	3(7.89%)	3(7.89%)	3(7.32%)	0	1(3.13%)	1(3.13%)	0
b6 話をはさむ機能	前の話に関連する別の話をさしこむ。	0	0	0	0	0	0	0	0	0
b7 話をそらす機能	前の話を避けて、別の話をする。	0	0	0	0	0	0	0	0	0
b8 話をささげる機能	前の話を続けないように断ち切る。	0	0	0	0	0	0	0	0	0
b9 話を変える機能	前の話を切り上げ、別の話に変える。	8(19.51%)	13(31.70%)	3(7.89%)	9(23.68%)	8(19.51%)	11(26.82%)	9(28.13%)	17(53.13%)	0
b10 話をまとめる機能	前の話をまとめて、しめくくる。	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C 話題終了機能	話題を終える。	0	0	0	0	0	1(2.44%)	0	0	0
c1 話を終える機能	話を全部終える。	0	0	0	0	0	1(2.44%)	0	0	0
c2 話を一応終える機能	前の話を途中で切り上げる。	0	0	0	0	0	0	0	0	0

5.1 母語場面の雑談におけるNSの物語の後続文脈への展開方法

【表1】によると、母語場面では、「物語の話段」の話題を他の話題に転換する「b9 話を変える機能」、「物語の話段」の話題を先へと進める「b3 話を進める機能」、「物語の話段」の「先行話段」の話題に戻す「b5 話を戻す機能」の3種が合わせて全体の約9割も用いられている。【例1】は「b9 話を変える機能」、【例2】は「b3 話を進める機能」、【例3】は「b5 話を戻す

⁵ Labov(1972) defines a minimal narrative as a sequence of two clauses which are temporally ordered.

⁶ 「『中心発話』とは、1話段内部の複数の発話連鎖を一つの話題のまとまりとして統括する機能を有する発話である。提題表現と叙述表現が複数の発話間にわたる場合や、倒置や省略される場合も少なくない。」(佐久間 2002:107)

⁷ メイナード(1993:51-52)による「前置き」の中の「(1)ジャンル移動の発表」「(5)その物語を相手がまだ知らないことを確かめ、物語を披露してもいいか許可を取る」「(7)聞き手から出されたテーマを受け入れた形の物語であることを伝える」が代表的である。

⁸ 物語に先行する話題の中心発話の統括する範囲を「先行話段」と称す。

⁹ 杉戸(1987:83)に従い、「発話」を「一人の参加者の一まとまりの音声の連続で、他の参加者の音声やポーズによって遮られるまでの間」と定義する。

¹⁰ 佐久間(2009:112)表1「文段の話題統括機能」参照。

機能」の例を示す。【例1】は、NS8がNS4の物語に対して『ツイッターみたい』と評価し、そこからNS4がツイッターの知り合いの人に関する話題に変えている。そこには「ツイッター」という「提題表現」のつながりがある。【例2】は、『コミュニケーション能力があったから留学先で友達を作ることができた』という話題を受けて、NS6が『言語を勉強するには、コミュニケーション能力は大事だ』という話題に進めている。【例3】は、NS1が『携帯を失くしたから、一番小さい容量のものに買い換えた』という物語の後で、NS1が214発話で「写真って結構容量食うよね」と話題を「先行話段」の『 아이폰の容量が小さいから写真を消した』という文脈に戻している。

【例1】b9 話を変える機能	【例2】b3 話を進める機能	【例3】b4 話を戻す機能
597NS4: で、なんか、なんか{笑}, その、「終わった、終わってない」の報告, 598NS8: うん、うん。 (8 発話省略) 607NS4: 投稿するのはどうだろうみたいな{笑}。 608NS8: うるせえて感じだよね。 609NS8: ツイッターかよ{笑}。 (8 発話省略) 618NS4: {笑}めっちゃ面白かった。 619NS8: うん、そうだね 620NS8: ツイッターで見たことあるって感じだよね。 (3 発話省略) 624NS4: あのー、今日、例のあの香ばしい人、メンヘラ? 625NS8: あー。 626NS4: ツイッターの、 627NS8: うん。 628NS4: 私の知り合いの人が、	1299NS6: もう、一番馴染んでたもん、向こうの子たちに{笑}。 1300NS1: で、その点数悪くても? 1301NS6: そう。 1302NS6: もう、ノリでなんとかしちゃう。 1303NS6: ノリで友達作れちゃうみたいな。 1304NS6: コミュニケーション能力だね。 1305NS1: うん。 1306NS6: やっぱさ、言語を勉強するって、それがすごい大事なんだね 1307NS1: そうだね 1308NS6: ね 1309NS1: あくまでも、ツールでしかないからね 1310NS6: そう、そう、そう、そう、そう。 1311NS1: 客観的にすごい思える、今ならば。 1312NS6: うん。 1313NS1: うん。 1314NS6: だって、日本語話せたって、日本人誰とも仲良くなれるわけじゃないしな。	156NS1: 写真見たい。 157NS6: いや、でも、消したかも。 (4 発話省略) 162NS6: この 아이폰はね、すごい容量が小さいの。 163NS1: あっ、わかる。 164NS6: っていうの//も、 165NS1: 同じく。 166NS6: 私ね、失くしたの、 아이폰を。 (44 発話省略) 211NS6: 「一番ちいちゃい方でもいいんです」って言って、 212NS1: ああー。 213NS6: 全然使えないんだから。 214NS1: 写真って結構容量食うよね 215NS6: うん。 216NS6: だから、もう、すぐパソコンに入れて、 217NS1: うん。 218NS6: 消す。

以上のことから、NSは物語を語り終えた後、つながりを保ちながら話題を継続していることがわかった。

5.2 母語場面と接触場面におけるNS1~5の物語の後続文脈への展開方法の相違

母語場面と接触場面におけるNS1~5の物語の後続文脈への展開方法は、【表1】に示すように、上位3位の「b9」「b3」「b5」に関して大きな違いは見られなかったが、母語場面の「I」のみの「b4」話をうながす機能は、接触場面では、「II」にのみ現れている。母語場面の【例4】は、NS6が物語を語り終えた後、860発話で「NS1も反抗期ないでしょ。」とNS1

【例4】b5 話をうながす機能 (母語場面)	【例5】b5 話をうながす機能 (接触場面)
852NS6: テレビ見てるのを見ると、どんだけ暇なんだよって思っちゃうけど、 853NS1: {笑}。 854NS6: あっ、見てないうちに、なんかしてんだろうなって。 855NS1: 偉い。 856NS1: 思いやりがある。 857NS6: えー? 858NS6: ないよ。 859NS1: 偉いわ。 860NS6: NS1も反抗期ないでしょ。 861NS1: ないなー。 (10 発話省略) 872NS1: 言えない、怖すぎて。	464CNS2: 初めて、こういう会話、全部日本語で出てきた時に、 465NS2: うん。 66CNS2: 先生も感動したっていう。 467NS2: {笑}。 468NS2: すごいね。 469CNS2: 「まさかこういう日が来る」って{笑}。 470NS2: {笑}成長した姿を。 471CNS2: うん。 472NS2: へえー、そうなんだ。 473NS2: えっ、じゃあ、大学は、Dだったの? 474CNS2: ううん、Dじゃないんです。 475CNS2: あのう、向こうの大学との、姉妹校みたいな。

に反抗期に関する次の物語を促している。接触場面の【例5】は、CNS2の高校時代の恩師と再会した時の物語の後に、NS2が473発話で「じゃあ」という「接続表現」を使ってCNS2に大学時代の情報提供を促している。これは、NSが母語場面では発話権取得のバランスを保つために、相手のNSに発話権を譲るのに対して、接触場面ではCNSの話題を膨らませるために、関連する事柄を尋ねるなどして話を続けさせようとする働きかけによるものである。また、大話段を開始する「a2話を再び始める機能」は、母語場面では雑談の談話現場に密接する話題が開始されるが、接触場面では、CNSの「評価」を加えない非協働的な物語への参加姿勢を受けて、NSがそれまでの話題とは無関係の全く異なる話題に変えている。

5.3 NSとCNSによる物語の後続文脈への展開方法の相違

【表1】によると、CNSが聞き手として「後続話段」を始める場合、全18例中に「b9話を変わる機能」が17例(94.44%)も用いられるが、「b3話を進める機能」は全く用いられていない。CNSがNSの物語から話題を先へと導けなかったのは、

物語の内容を理解できていないことによるものである。【例6】は、CNS1がNS1の「夢」の物語を受けた直後に、「評価」を挟まずに突然CNS1自身の異なる「夢」の話題へと変えている。NS1はそれに従い、CNS1の夢の語りにも協力的に参加している。こうしたCNSの唐突な話題展開は、楊(2005)等も指摘している。【例7】は、CNS2が「先行話段」で関西弁を出しているが、NS2が「先行話段」で関西弁を出していることに対して、NS2が関西弁をアイデンティティーとして勉強したいという学生がいたという物語を用いて、出していいと主張している。その後、CNS2が305発話で「そういう、証としてみたいな。」とNSと協働的に「評価」を構築しているが、310発話で「関西弁は難しいですね。」と話題を違う方向に変えている。一方、NSの用いる「a2話を再び始める機能」と「b4話をうながす機能」を、CNSが使用していないのも、接触場面におけるNSとCNSの間に「言語ホスト」と「言語ゲスト」の力関係(ファン, 1998)があることによるものだろう。

【例6】 b9 話を変える機能	【例7】 b9 話を変える機能
271NS1: 洗濯、うん、学校にいるんだけど、	277CNS2: 関西弁は、最近、あのお、封印しよう
272CNS1: うん。	と思つて。
273NS1: あー、やべえ、家に洗濯干してあるとか、	278NS2: へえー。
274CNS1: ああー。	279NS2: いいじゃん、出せば
275NS1: なんか嫌な思い。	(7発話省略)
276CNS1: うん、そう。	287NS2: だって、京都で勉強してる人は、なんか、
277NS1: うん。	関西弁勉強したいとか言つて、
278CNS1: 私、あれ、あれ、いつもゼミの夢を見たり、	(17発話省略)
279NS1: {笑}。	305CNS2: そういう、証としてみたいな。
280CNS1: 調査の夢を見たり、文字化の夢を見たり、	306NS2: うん。
281NS1: うん。	307NS2: 証として。
282CNS1: するの。	308NS2: 「ほんまか」とか言つて//{笑}。
283NS1: 終わらない夢?	309CNS2: {笑}。
284CNS1: そう。	310CNS2: 関西弁は難しいですね。
285NS1: なんか、終わらないよって苦しむ夢?	311NS2: うん。
	312CNS2: うん。
	313NS2: 難しい。

たいという学生がいたという物語を用いて、出していいと主張している。その後、CNS2が305発話で「そういう、証としてみたいな。」とNSと協働的に「評価」を構築しているが、310発話で「関西弁は難しいですね。」と話題を違う方向に変えている。一方、NSの用いる「a2話を再び始める機能」と「b4話をうながす機能」を、CNSが使用していないのも、接触場面におけるNSとCNSの間に「言語ホスト」と「言語ゲスト」の力関係(ファン, 1998)があることによるものだろう。

6. おわりに

本研究では、日本語の雑談における物語の後続文脈への展開方法を、佐久間(2009:112)の「話題統括機能」という観点から分析した結果、母語場面におけるNSは、物語に対する評価を挟み、つながりを保ちながら話題を先へと進め、物語を終えた後、以前の雑談の文脈に戻して話題を再開することが多かった。一方、CNSは、日本語の雑談における物語の内容が理解できず、NSの物語の後、物語の内容の一部に関連する話題で話の本筋から外れる方向に変えることがあったが、それはCNSが日本語力不足からか、話段全体の内容を把握しきれずNSの直前の物語のみに集中していることによるものであろう。

したがって、日本語の会話教育では、NSの展開例の提示等による談話全体の文脈を踏まえた話題展開方法の教育が必要である。今後は、雑談の談話資料を増やし、物語の話題別に後続文脈への展開方法を考察していく必要がある。

参考文献

- ファン, サウクエン(1998). 接触場面における言語管理 日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成研究会発表原稿・会議要録, 1-16.
- 木田真里・小玉安恵(2001). 上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析—雑談の場での経験談の談話指導に向けて— 日本語国際センター紀要 11, 31-49.
- Labov, W. (1972) *Language in the Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 李麗燕(2000). 日本語母語話者の雑談における「物語」の研究—会話管理の観点から— くろしお出版
- メイナード, 泉子・K(1993). 会話分析 くろしお出版
- 中井陽子(2005). 談話分析の視点を生かした会話授業—ストーリーテリングの技能指導の実践報告— 日本語教育 126, 94-103.
- 野村眞木夫(2000). 日本語のテキスト—関係・効果・様相— ひつじ書房
- 佐々木泰子(2010). 接触場面と母語場面—体験談の終結部から見たその特徴— 言語文化と日本語教育 39, 33-40.
- 佐久間まゆみ(1987). 文段認定の一基準(I)—提題表現の統括— 文藝言語研究言語編 11, 89-135.
- (2002). 3 接続詞・指示詞と文連鎖 野田尚史他(編) 日本語の文法 4 複文と談話, 119-189. 岩波書店
- (2003). 第5章 文章・談話における「段」の統括機能 佐久間まゆみ(編)・北原保雄(監修) 朝倉日本語講座 7 文章・談話, 91-119. 朝倉書店
- (2009). 第2章 日本語表現の機構 第3節 表現の展開・構造 糸井通浩・半沢幹一(編) 日本語表現学を学ぶ人のために, 101-116. 世界思想社
- 杉戸清樹(1987). 発話のうけつぎ 国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相—座談資料の分析—, 68-106. 三省堂
- 鈴木伸子(2006). 接触場面における日本語学習者の体験談の構造—「評価」の協働構築が可能にするもの— アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要 29, 1-17.
- 楊虹(2005). 日中接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して— 言語文化と日本語教育 30, 31-40.